
 学 会 記 事

第174回新潟循環器談話会

日 時 昭和63年3月5日(土)午後
午後3時～6時
会 場 新潟大学医学部有任記念館

テ ー マ 演 題

各科領域からみた先天性心疾患

1) NICU における先天性心疾患例の臨床統計

吉沢 浩志・石田 道雄 (新潟大学)
竹田 浩・大桃 幸夫 (分娩部 NICU)
竹内 正七

先天性心疾患 (CHD) 児出生の頻度は出生1000に対して約6～8名とされ、他の先天異常に比べても多く、また新生児期に発生する例は重症例が多くを占め予後も極めて不良である。

昭和56年4月のNICU開設以来、昭和62年までに経験したCHD例は67例で、他に超・極小未熟児例に合併したPDA例が26例あった。

この間の総入院児数は1,179名であるので、CHD児の占める頻度は5.7%であった。

疾患別にはVSDが14例と最も多く、ASD 4例、T/F 4例、無脾症4例、TGA 4例、PS or PA 5例、TAPVR 3例、HLHS 3例などがあった。他にAV block 2例、一過性不整脈4例などが経験された。また染色体異常例が9例、他の先天異常を合併した複雑奇形例が16例あった。

67例中死亡の転帰をとったのは42例62.7%であり、NICUにおけるCHD児の治療は関連各科の綿密な連携プレーを行い、予後の改善に努めなければならない最大関心事である。

2) 先天性心疾患合併妊婦の臨床統計

吉沢 浩志・石田 道雄 (新潟大学産科)
吉谷 徳夫・竹内 正七

過去17年間に当科で経験した心疾患合併妊婦は278例で、この間の総分娩数11,161例の2.49%の頻度であった。

278例の心疾患のうち143例51.4%が先天性心疾患例であり、心疾患合併妊婦に占める先天性心疾患の頻度が高くなってきている。

先天性心疾患の疾患別頻度はVSDが47例と最も多

く、次いでASD 41例、T/F 20例、PDA 12例、PS 9例、Ebstein 奇形5例、その他9例で、VSD、ASD例が61.5%であった。

NYHAの重症度分類ではI度が圧倒的に多く、過去7年間70例中I度60例85.7%、II度9例12%、III度1例1.4%でIV度例は無かった。

また、妊娠・分娩中の心不全発症例は無く、分娩様式では母体負担軽減の適応で施行される吸引・鉗子分娩が高率である他、特に重篤な異常は無かった。新生児については子宮内胎児発育遅延例がやや多い傾向にあるが有意なものではなく、幸いに先天異常例はPS合併例からの原因不明胎児水腫、VSD例1例であった。

3) 失神を併った高齢者 ECD の 1 例

岸本 秀文・鈴木 善幸 (県立中央病院)
大滝 英二・高野 諭 (循環器内科)
布施 克也 (県立妙高病院)
(内科)

66才にて生存するECDの例について報告する。症例は66才女性。体動時の動悸と息切れ、失神を主訴として入院。理学的にはASDを思わせる聴診所見を呈し、血液ガスは低酸素血症を示した。胸部X線は肺血管陰影の増強を示し、心電図上 -16° の左軸偏位、完全右脚ブロックを呈した。心エコーでは心房中隔の一次孔欠損と僧帽弁前尖のクレフトを認めた。心臓カテーテル検査では、RAでの酸素飽和度のStep up、Qp/QS 5.31 L/R shunt 45.4%が認められた。ジギタリス、ベラパミルで自覚症状は軽快している。失神の原因は明らかにならなかったが、過去の報告についてまとめ、若干の考察を加えた。

4) 手術適応が問題となった成人 ASD 症例の検討

結城 伸泰・五十嵐 裕
小池 隆司・松原 琢 (新潟大学第一内科)
山添 優・和泉 徹

成人ASDでは左室コンプライアンスの低下と肺高血圧が2大問題点である。今回我々は前者が問題となった3症例と後者が問題となった1症例とを報告し、バルーン閉塞試験の意義について考察を加えた。前者の内訳は肥大型心筋症の合併が疑われた例、陳旧性心筋梗塞合併例、著明な高血圧を伴った例であり、いずれも閉塞試験でLVEDPが30mmHg以上に上昇した。第3例のみニフェジピン負荷後LVEDPは18mmHgへ低下した